

そらら

soralium
粉芽の生じる場所第 27 号
クリスマス号発行
南花台キリスト教会

いのちは大事と
百回言うよりも
君が大事と呼ばれる方が
生きていく勇気が
わいてくる。



上記のメッセージを告げる CM が流されていました。励ましのメッセージは一般論的に語られるより、個人的に語られる方が心に響きます。

ところで「いのちが大事である」ことが、論理的に正しい、という教育を私たちは受けてきたのでしょうか。「お互いに嫌と思うことはやめましょう」という程度でしょう。実は現在の学校教育で標準的に教えられている内容では、「いのちが大事である」と論理的に説明はできません。なぜなら教育のベースが「進化論が正しい」としているからです。進化論教育でいのちの尊さを説明するのは不可能です。

なぜでしょうか。進化によるとまず自然界は「宇宙に偶然にあったチリ(ホコリ)が固まって地球ができた。」からスタートします。「勝手に出来たホコリのカタマリ」は家の部屋の端っこに固まっているゴミ同然ですから、尊い、価値がある、かけがえのない存在、と言うことは論理的に無理があります。さらに進化論を突き詰めると「弱肉強食のルールで勝残ることが優秀の証」ということですから、弱い生物が滅ぶのはあたりまえ、という理屈になるのです。

このように「負けた方が悪い」というメッセージが進化論教育の根底にあり、その進化論をベースとする学校教育は「弱肉強食」「容赦無用」となります。「お互いを大切にしよう」という理念はうわべだけの教えになってしまうのはある意味当然、ということになります。

ところで、自然界や生命をつくられた神様が存在する、と語る「聖書」にこういう言葉が書かれています。

新約
聖書

神は実にそのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者がひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

ヨハネによる福音書第3章16節

まことの神は創造主です。それも機械的に服従させるように人間を創造されたのではなく、愛するかけがえのない存在として創造されました。そのため、人間は神を求める心があります(人間は、その思いを自分の都合をかなえる偽の神を仕立てました。世界中どの言語にも「神」という言葉があることがその証拠です。)まことの神を無視し、欲望の限りを尽くし、自己中心に生きることを聖書は罪といいます。その罪の結末は、「火と硫黄の燃える池で永遠に焼かれる。」ところでの裁きです。

裁きを下す神は冷酷なのでしょうか。正しい方が罪を裁くのは当然のことです。しかし「神は愛です。」と聖書に書かれているように、ご自身が創造された人間すべてを愛しておられます。ですからあなたが罪の裁きにあわないよう、救いの道も与えてくださっています。「私が道であり、真理であり、いのちなのです。」と語られたイエス・キリストが私たちの救いなのです。先のヨハネによる福音書の「御子」とは、イエスキリストのことです。御子イエスキリストを信じる、とは、彼が私たちの罪を背負い、ゴルゴダの丘の上で十字架処刑されたこと、そのことが自分自身のためであること、キリストは3日後によみがえられた真の神であること、を信じることです。

なぜ聖書がこの世に存在するのか、キリストの福音が宣べ伝えられるのか、神様がすべての人にキリストを信じて欲しい、裁きではなく、いのち(永遠の天国)を受け取るものとなって欲しいと願っておられるからです。まずは聖書を読んでいただきたい、学んで頂きたい、と望んでいます。聖書を知る、学ぶために是非キリスト教会にお立ち寄りくださいますよう、お勧めいたします。

